

## 新大長征（ニュー・ロンゲスト・マーチ）

「クリストハルト・ディツカー……元同盟軍大尉さんですか」

もともとらしく書類に目を凝らしているような振りをしながら、アラヌス・ザイデルは、向かいのソファに身を沈めた若者を観察した。

まだ若い。書類には二六歳とあったが、年齢詐称はないようだ。濃い黒褐色の髪と緑彩の強い榛色の瞳は帝国出身者には珍しいが、希少性を主張できるほどではない。

「二六で大尉さんか。世が世なら、今頃は佐官殿にでもなっておられたんじゃないですか」

「そうかも知れませんが、同盟軍はもうありません。これからは自分で自分の生きる道を探すしかないんです」

言葉に淀みはない。少年時代に同盟へ亡命したということだが、操る

帝国公用語に同盟公用語の訛りはほとんど見られないようだ。

「亡命されたのはおいくつの時で？」

「一〇歳の時でした。同盟暦……じゃない、宇宙暦七九四年に同盟軍士官学校入学。七九七年に卒業し、同盟軍第一艦隊に配属されました」  
「なるほどねえ、それでそれから五年ちよつとで大尉さんか……」

「早すぎる、とでも？」

「そうは言いませんがね。何というか、ヘル・デイツカー、何となくあなたが昔の知り合いを思い出させてしようがないんで」

「昔の知り合いとおっしゃる？」

「ええ」

面接者の経歴を示したホ口書類をテーブルに戻して、アラヌスはソファの上で軽く姿勢を正した。脂気のない髪と、こざっぱりとはしているが作業服姿のアラヌスは、これでもロルフ・ウント・アラヌス商会社長である。機関部所属の下士官として帝国軍で一〇年近くの軍務を勤め上げた彼が、今は亡き弟の名と自分の名を冠して立ち上げた、航空機関

維持修理をメイン業務にする小さな会社だった。

父親の工場を引き継いだとは言え、なれない会社経営に四苦八苦し、あやうく倒産させかけたこともあるが、今では仕事も増え、社員も十数名を抱えるに至っている。

その彼に、これまでにない大きな仕事が舞い込んできたのは、今年の四月末のことだった。

「皇帝陛下は、イゼルローン共和国との和解を諒せられ、その証としてイゼルローン要塞の同共和国への譲渡を決し給いたり。併せ、同要塞を以てのイゼルローン共和国の、帝国旧領土および新領土よりの退去を裁可あらせられたり」

この知らせに、アラヌスも『皇帝陛下も随分と太っ腹なことをなさるもんだぜ』と周囲に驚きを語ったものだった。

「何もイゼルローン要塞まるごとくれてやっちゃまうことなんかない

じゃねえか。ハイネセンだっけか、あの辺を割譲して、勝手にやっつてろと仰つてもよかつたと思うがねえ……」

「ま、その辺はいろいろと雲の上のお方達の、大人の事情つてやつがおありなんでしょうさ……それに……」

声を潜めたのは、ロルフ・ウント・アラヌス商会で人事担当を務めてくれているハンス・トレツチエルだった。ちなみにアラヌスの軍人時代の戦友でもある。

「皇帝陛下のご病気、かなり重いつて聞いてますぜ。下手あすりや、近々に御崩御つてこともないではないかもつて、皆、言ってます」

「縁起でもねえこと言つてんじゃねえぞ、トレツチエル」

「そうは言つても、前任伍長……じゃなくて社長。あの変異性……なんとか病つて、名前聞いただけでも危やばいでしょうが……いや、だから、帝国としちやあ、ヤン・ウエンリーと共和主義者なんて危険物、帝国領内に置いときたくないつてことじゃありませんか。あの皇帝陛下と帝国大公、それに双璧が束になつてかかつてもやつつけられなかつた難物です

ぜ」

「ああ、たしかにな」

カイザー 皇帝ラインハルトが、ただちに幽明境を異にすることはないとしても、当面、帝国は政治と軍事の両面、さらには経済面の施策においても、そのカリスマを期待できなくなるのは間違いない。そして、その当面は一年程度ではなく、数年に及ぶかも知れないのだ。

玉座の長期にわたる空位は、当然のように帝国の政情に不安定さを生む。後に『英雄の時代最後の騒乱』と呼ばれた、あの叛乱は辛うじて終熄したが、大空位時代が続けば、二度目、三度目が起きないともかぎらない。

「なんで帝国大公が二代目を継がれないんですかね」

トレツチエルの言葉は、アラヌスの胸中を代弁したものだつた。

帝国大公……すなわちジークフリード・キルヒアイス元帥。カイザー 皇帝ラインハルトの無二の親友であり、カイザー 皇帝をして『我が半身』とまで言わしめた

存在。ラインハルトもまた、彼の病中、帝位の代行、一説では第二代皇帝への即位をキルヒアイスに命じたと伝えられる。

だが、キルヒアイスは即位の意思を示していない。皇帝<sup>カイザー</sup>ラインハルトを代行して帝国の統治に任じること、併せて皇帝<sup>カイザー</sup>の姉であるグリューネワルト大公妃アンネローゼを正式に帝国大公妃として娶ることを宣言したのみである。

「まあ、それにしても、本当に大丈夫なんですかね。グリューネワルト大公妃とか、帝国大公妃とか言いますけど、前の皇帝の愛人だった人でしょ。それも、皇帝が死んだとき、その大公妃さんの——（アンネローゼの名誉のために削除）——だったとかいうじゃありませんか」

「いい加減にしろ、トレツチエル！ いくら何でも不敬罪食らうぞ。忬度<sup>帝国大公</sup>つてやつじゃねえ、万一でもあの方の耳に入ったら、一〇〇パーセント、お前の首は宙に飛ぶぜ」

「へ、おつかねえ。今のは聞かなかったことにして下さい、前任伍長」

「社長だ！」

脱線が過ぎたが、ロルフ・ウント・アラヌス商会にその仕事を持ち込まれたのは、その一月ほどあとのこと。イゼルローン共和国が、共和国主席フレデリカ・G・ヤンの名で、『新たな大長征』参加者を大々的に募集し始めた、その直後のことだった。

グリーンヒル

仕事の内容は、イゼルローン機動要塞に搭載された航宙エンジン……ワープ機関……と通常航行用エンジンの解体を含む修理と整備であり、工期は約半年。参加予定の関連事業者は数十社にも及ぶ。

最初、アラヌスは『俺ンところみたいな零細企業の出る幕じゃない』と気にもしていなかったが、入札参加への打診は、他ならぬ帝国政府からのものだった。

最初、それが昔のよしみを慮った帝国大公キルヒアイスの口添えかと思ひ、そこまで気を遣ってもらう謂われはない、と無視を決め込んだアラヌスだった。だが、実際には入札資格のあるすべての整備会社に入札打診が出されていることが分かって気を変えた。

「やってやろうじゃねえか。こんなでかい仕事、俺の一生に二度はねえぞ」

開札の結果、見事にロルフ・ウント・アラヌス商会は受注に成功、あと一ヶ月以内に、アラヌスは従業員と家族を連れてイゼルローン機動要塞に赴かねばならない。

ただ、この仕事には一つのネックがあつた——言葉の問題だつた。

イゼルローン共和国の公用語は当然のように同盟公用語である。一方、アラヌスを初めとして商会の従業員は全員帝国人。士官出身者はおらず、同盟公用語に通じている人間はいない。

その結果が、今回の面接なのである。帝国と同盟、両国の公用語に通じ、できれば軍関係や契約関係の用語に詳しい人間を、という条件で人材募集をかけたのだ。この条件では、一般人からの採用は難しい。帝国から同盟に亡命したか、その逆の、できれば退役士官が狙い目だった。ただ、士官学校を出るか、そうでなくとも幹部登用試験を通つて士官の地位を手に入れた古参の下士官ともなれば、人材としても有能な存在が

多い。事実、帝国内の騒乱が一段落し、新旧両領土での再建事業が活発化するに連れて、そうした人材は急激に大手の事業者たちによって吸収されつつあったのだ。

ただ、アラヌスは幸運に恵まれた。新領土の総督府経由で、旧同盟軍を若くして退役した、帝国からの亡命者が帝国内での職を求めているとの紹介を得たのだ。その結果、こうして有望な候補者を面接するに至っているのである。

「その知り合いと言われるのは、軍時代の上官でいらっしゃる？」

候補者……クリス・ディツカー元同盟軍大尉は当然のこのように、その問いを放ってきた。

「ほう、分かりますかね」

「軍の経験が長いと聞きました。とすれば、昔、上官だった士官の中に、私のような若僧がいたとしても不思議ではありません」

「ま、若僧ではありませんでしたけどね。いい人でしたよ、基本的には。平民……って分かりますか？」

「ええ。私も平民の出身です」

「デイツカーは微かに頬笑んで頷いた。

「ああ、そうでしたね……平民出身で、俺が下に就いた時は大尉だった。俺たち、平民出の下士官や兵どもにとっては、眩しいような存在でした。大尉も……ええ、ハルトマン・ベントラム大尉って人でした」

「ベントラム大尉は、良く、あなた方を庇ってくれた、と？」

「ええ……」

アラヌスは迷った。何と言うべきか。確かにベントラム大尉は、無理解な貴族士官や無能な貴族艦長から、何度も彼らを庇ってくれた。だが、そのベントラム大尉が言い放ち、彼らの信頼をどぶに叩き込んだ言葉を、アラヌスはハッキリと覚えている。

「お前たちは手足だ。手足が考える必要などない。考えるのは、エリートたる士官がやるのだ」

一方で、アラヌスがベントラム大尉を『俺たちへの裏切り者』として憎悪の対象としきれない理由は、大尉によって生命を救われたからだ。最後の最後の瞬間、ベントラム大尉は身を捨てて、アラヌスを救ってくれた。彼を突き放した反動で恒星アルトミュールの強烈な放射のただ中に飛び出していくとき、確かにベントラム大尉が微笑っていた……アラヌスの記憶の中ではそうなっている。

デイツカー元大尉を、どうしてベントラム大尉に似ていると思ったのか、アラヌスにはよく分からなかった。自らを『エリート』と言い放ち、アラヌス達を自分の踏み台としてしか見ていなかった彼なのか、身を犠牲にしてアルトミュールの光の中で炎の塊になったベントラムなのか。「まあ、いい上官でしたよ。私の生命の恩人です」

平民出身で、かつ、若くして士官として栄進した。その経歴が、良く似た履歴を持っていたかつての上官への相似を思わせるだけなのか……確かに良い上官だった。あの理想の上官ともいえるべき若者達に出会うまでは――。

『生命の恩人』の言葉に、ドイツカーは一瞬驚いたように目を睜り、それから面映ゆそうな笑顔になった。

「それは……私ではヘル・ザイデルの生命の恩人にはなれそうにないです」

「いや、別に生命の恩人になつてもらうつもりはありません。聞きたいことはすべてお聞きしました。わざわざ、こんな辺境の惑星まで出向いて頂いて恐縮です。採否の結果は、三日以内にお知らせしますが、よろしいですかね」

「ええ。滞在先は既にお知らせしてあると思いますが」

市内のビジネスホテルの名前を確認して、アラヌスは頷いた。

「確かに。できるだけ良いお知らせをできるようにするつもりです」

立ち上がり、面接の終了を告げるアラヌスに、ドイツカーもソファから長身を立ち上がらせると右手を差し出した。

「トレツチエル」

事務所のエントランスから、面接者の背が工場の敷地の外に去って行

くのを確認し、アラヌスは振り返って、人事担当の部下を呼んだ。

「もう一度、ディツカー元大尉の身元を洗っておけ」

「怪しいんですか？」

だったら採用を止めてはどうかと言うトレツチエルに、アラヌスは苦笑して首を振った。

「念のためだ。ディツカー元大尉を逃したら、仕事自体が没<sup>ぼつ</sup>っちゃうかも知れねえ。だから、採用見送りはないさ」

「じ、じゃあ？」

「さてね。俺にも良くわからねえ。ただ、やっぱり気になるのさ。なんで、あの元大尉があんなにベントラム大尉のことを思い出させるのかってな。全然似てないのに、変だと思うだろ」

「変ですよ、確かに……でも、社長がそう言うなら、総督府でしたっけ、あつちに再照会しておきます。あそこは仕事が早いですからね、二日あれば、回答来ると思います」

「ああ、頼んだ」

二日後、新領土総督府……正確には、総督府の委託を受けて旧領土の行政一般にあたっている組織だったが……からの回答が届いた。

「ええと、クリストハルト・ディツカー……略してクリス・ディツカーって呼ばれていたそうです。確かに帝国暦四八九年……あっちの暦で七九八年に同盟軍士官学校ハイネセン校を卒業でしているそうです。卒業時の席次ってんですか、成績順は一一三番だそうです」

微かな違和感が胸をかすめたような気がしたが、それが何に起因するものか、この時のアラヌスには分からなかった。少なくとも総督府とその配下の行政庁は無能ではない。彼らがディツカー元大尉の身許を確認したなら、確かにクリス・ディツカーは同盟軍の士官として存在したのだ。

「——あと、家族ですが、姉が一人いるそうです。両親は亡命時に死亡……ですか。ひどい話ですね。一〇歳と……この姉が一五歳だったそうですぞ。子供二人で、言葉も通じない叛乱軍ども、じゃなくて同盟領

に放り出されたってわけですか」

「苦勞したってことさ。まあ、ベントラム大尉も士官学校を出るのは樂だったか、入るのは大變だったとか言ってたな」

「なんでです？」

「士官学校では訓練と勉強さえしていれば良かった。入るには貴族の紹介者だとか、しかるべき筋にしかるべき挨拶だとか、まあ、ただ頭が良くて身体ができてるだけじゃあ、平民出には飛び越え得ざる高いハードルってわけさ」

そうした勞苦が、あの若い元大尉に、ベントラム大尉に似た雰囲気なり、臭いなりをまとわせることになったのかも知れない。

「その姉とやらいうのはどうしているんだ？」

「確認できる最終居住地はバーラト星系……って旧同盟の首都星系です。そのバーラト第四惑星テルヌーゼンだそうです。で、今回の

ニュー・ロンゲスト・マーチ

『新大長征』に参加の申し込みをしていたが、二ヶ月ばかり前に申し込みを取りやめて、テルヌーゼンからも引越したって、そうありま

す。転居先は不明、ただし、帝国の故郷に戻るとか周囲に言い残して行った」

「別に変でもあるまい。聞いただろ、ムライ中将の話……」

長くヤン・ウエンリーの参謀長を務めたムライ中将が『ニュー・ロングスト・マーチ新大長征』

への参加を取りやめ、ハイネセンに留まる旨を公表したのだ。結果、二〇万人以上が『ニュー・ロングスト・マーチ新大長征』への参加を辞退し、なおも辞退者が出ているという。

「帝国で職もみつかりそうだ。なら、無理に見も知らぬ宇宙の果てへ行って、散々に苦勞することもねえかってそういうことさ」

「違いないですね。じゃあ、ヘル・デイツカーには採用の通知を出します。いいですね」

「了解だ。いつから勤務に就けるか、それも確認しておいてくれ」

アラヌスたちが、クリス・デイツカーを含む商会の全社員と、帯同を希望した家族を連れて故郷を離れ、補修のために帝国領域に入ってきたイゼルローン機動要塞に向かったのは、その半月後のことだった。

アラヌスは、ドイツカーに、彼の姉の同行について打診したが、ドイツカーは微笑って謝絶した。

「姉は余り宇宙旅行を好んでいません。ちようど、いい家も見つかつたし、こうして職に就けたおかげで生活にも困る心配がありません。それに……」

重大な秘密を打ち明けるように、ドイツカーは声を潜めて囁いたのだ。「私のために姉はずっと独り身を通してきました。もう私のことは心配しなくて良いから、やりたいことをやってくれ。そう言い置いてきたんです」

「うっかりイゼルローンでいい男をみつけたりしたら、そのまま『新大長征』にもう一度参加したいなんて言い出すんじゃないか、つてそつちが心配だつたんじやないのか？」

ニユー・ロンゲスト・マーチ

『新大長征』の言葉に、一瞬、ドイツカーは驚いたように榛色の目を見開いたが、その表情が照れたような苦笑に取って代わられるのに時間はいかからなかつた。

「ええ、そうです。相手を探すなら、帝国公用語で冗談を言い合える相手にしてくれと言いました。私は士官学校入学のために同盟の公用語を徹底的に学びましたが、姉の語学力はそこまで行っていないからね。姉もその方が気楽だ、と言っていました」

アラヌスは頷いた。ドイツカーの新居についても確認済みで、確かに女性が一人住まいしていることも報告されてきている。年格好、容姿とも、総督府の報告にあつたドイツカーの姉と合致していた。